

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.8 August 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

8

CONTENTS

・巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その5
／井上 昭洋 1

・英語文献にみる天理教 (17)

『Japan To-Day (現時の日本)』(4)
／尾上 貴行 2

・音のちから—中国古代の人と音楽 (33)

逸話を通して見る音の世界—長安市東市の琵琶の腕くらべ—
／中 純子 3

・ブラジルの宗教的風景 (15)

アンテペラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動⑨
／中西 光一 4

・熊本地震と私—災害支援に学んだこと (新連載)

はじめに
／茶木谷 吉信 5

・2026 年度公開教学講座：布教伝道と伝道学 (2)

第2講：異文化伝道論1—イスラームの宣教活動に学ぶ
／澤井 真 6

・おやさと研究所ニュース 7

第387回研究報告会(5月14日)／
第388回研究報告会(6月29日)／
連載執筆のねらいと執筆者紹介／
2026年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その5

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

アニミズムとは、一般に、自然界の様々な事物に靈魂や精霊の存在を認め、それら霊的存在を信仰することとされる。文化人類学者の岩田慶治は、宗教の起源と捉えられてきたこのアニミズムについて独自の理論を提唱した。すなわち、それを宗教的な思考体系として外側から分析するのではなく、人間が世界と直接触れ合う体験の中に見えてくるものとして内側から捉え直そうとしたのである。岩田にとって「元の理(元初まりの話)」は、そのような体験を想起させるテキストであった。

おそらく「元の理」を題材に自由に語ったのだろう。彼の論考は、行儀良く正面から「元初まりの話」を考察するというより、このテキストに触発されつつ、彼のアニミズム論を自由闊達に展開しながら、思うところを述べたもののように感じられる。「元初まりの話」は人間が生まれる以前の、世界が未だ混沌とした状態から始まる創世説話である。人間と草木虫魚が未だ分かれていない場所への眼差し、主客未分への志向といった岩田の思想の核心が「元の理」の世界観と共鳴し、彼はそれをアニミズムの世界から捉え返してみせたのである。

岩田は、教祖の説いた「元初まりの話」は大和の農民のおばあさんが「この世の中は、こうして始まったんだよ」と孫たちに説いて聞かせるようなお話だと、さらりと述べる。この説話を聞いて、孫たちは身近なドジョウを通して人間の誕生について思いを巡らす。世界の創造という大きな問題について、子供にも分かるように素朴に語られた説話というわけだ。

岩田の目には、大和の人である教祖であれば、昔の古典にならって国土の豊かさを説いても良かったはずなのに、魚ばかり出てくる泥海の世界を語っていることが不思議に映る。岩田は、「元初まりの話」に水中の動物が出てくるのは、名前のついた事物では表現

しつくせないもの、水の底、深層の世界があったからではないかと考える。名前のつかない生き物の方が、この世界の由来を本当に語っているというのである。教祖は子供たちにも分かりやすいように、生き物に名前をつけて話をしたもの、名前がつく以前の世界を見ていたと岩田は捉える。

彼は、「何千年前、何万年前と昨日、今日とでどこが違うのか」と問いかける。大事なことは時間の上での昔ではなく、人間の中に流れる源流の所在だと言うのだ。だからこそ、「元の理」というものは「今の理」であり、例えば、朝ご飯の味噌汁の中に見つける生命に満ちた世界—味噌汁を泥海と見立てて見えてくる世界—が「元の理」の「今朝的表現」であり、朝のひとときの「今の理」であるとする。今朝の風景と前日の風景、元の風景というものは、それほど違わないのだと言うのである。

自分というものを現在から過去に遡っていくと誕生の原点に到達するが、岩田はその時に自分を支えたものは何であったかを問う。それは病院のベッドであったかもしれない、人間誕生の原点でそのベッドに当たるものは泥海ではないかと考える。この泥海は常に自分を支えてくれるのであり、泥海と自分は二つで一つであり、それを内側から直感するのがアニミズムの世界だと言う。その直感を生きたのが教祖ではなかったか。教祖は宇宙がごく日常の出来事として瞬間、瞬間に誕生していること、「元の理」が「今の理」として現れていることにいつも立ち会うことができた人であったと岩田は見る。そしてその可能性は私たち一人ひとりに開かれていると話を結ぶ。

[註]

(1) 岩田慶治(1988)「自分からの自由—『元の理』は『今の理』」『G-TEN』第35号、53～68頁。(『講座「元の理」の世界2:「元の理」の象徴学』に再録)